

スタッドのある風景V

オードレイ・ケイゼル、マギー・ネストレ・オンタノン『女子サッカー 女性にサッカーの未来』を読む¹

澤田 哲生

フランス女子サッカー

サッカー女子日本代表が優勝を果たした2011年のサッカー女子ワールドカップは、フランス女子サッカー界にとっても転機となる大会だった。この大会で、フランス代表は、国際大会で初めて準決勝に進出した。アメリカ代表との壮絶な点の取り合いの末に惜しくも敗退した代表選手たちの姿は、前年の南アフリカワールドカップにおける男子チームの醜態も相まって、フランス国民にひととき感動を与えるものであった。以後、フランス女子サッカー界は、かつてないほどにメディアの注目を浴びるようになる。

社会的な注目が増大するなかで、女子サッカーをはじめとする女子スポーツの惨状、ひいてはフランス社会に根強く残る男尊女卑の伝統が、皮肉にもクローズ・アップされることになった。ニコール・ペリー女性の権利相のテクニカル・アドバイザーを務めたオードレイ・ケイゼルと元陸上女子200メートルフランス代表のマギー・ネストレ・オンタノンは、まさにこの時期に、『女子サッカー』という書物を著した。元サッカー男子フランス代表選手で、現在は反人種差別の活動に取り組むリリアン・テュラムが序文を寄せたこの著書は、フランス女子サッカーが直面する問題——そしてその背後に根強く残る男尊女卑の社会構造——を知るうえで欠かせることのできない一冊である。

「女子」サッカー

冒頭から取り組む問題の難しさを前にした著者たちの呻吟が読み取られる。「この女子サッカーに捧げられた小著を、サッカー選手たち、つまり男たちについて語ることから始めるのは皮肉に思われる。しかし、読者にとっての開始地点は、そうしたところにあるのだから、別の開始地点を選んではいったら、きっと不自然なものになってしまうはずである。今日フランス

に暮らす者なら誰しも、『サッカー』という用語から自然と思いつくのは、女子チームよりも男子チームなのだ」(15)。フランスにおいて「サッカー(football)」という名詞は、男女を弁別する形容詞(masculin/féminin)を付ける以前に、男子サッカーのことを指し示す。男子／女子の弁別が明確なフィギュア・スケートやバレーボールと比べると対照的である。サッカーについて語ることは、「男子」サッカーについて語ることなのである。女子がサッカーに携わる場合に、当のサッカーという用語には人工的に「女子」という形容詞が付される。サッカー選手(footballeur/footballeuse)という用語に関しても、女性形は男性名詞の派生形にすぎない。

サッカーという競技に根ざした男性優位の文化は、アスリートの幼年期の競技選択にまでさかのぼる。二人の著者は、女子フランス代表の中心選手ソニア・ボンパストゥールの回想を採り上げる。「祖父を説得するのが一番大変だったわ。彼はサッカーの大ファンだったけど、私がサッカー選手(footballeuse)になるなんて、彼にしてみれば、ありえないことだったのよ」(16)。女子がサッカーをするなどありえないという前提がフランス社会に定着しており、多くの女性は、幼年期の競技選択の時点で、サッカー競技を断念する。

サッカーは男のスポーツという前提が社会生活のコードとなっているがゆえに、このスポーツは、今日、男子スポーツの「王様」(17)として君臨する。この図式が社会問題の温床となりうることを、二人の著者は見抜いている。彼女たちが挙げるのは、ベルリンのアルテミス通り(24)と南アフリカワールドカップ前後に発覚したフランス代表選手の未成年買春騒動(ザビア事件、27)、等々である。前者は売春婦が集まるベルリンのストリートであり、2006年のドイツ・ワールドカップの期間中、客を引く女性が世界中から押し寄せた。後者は、一流サッカー選手、つまり男のスポーツの勝者の性的

モラルを物語る出来事である。どちらの事件もサッカーというスポーツにおいて、選手にせよ観客にせよ、男性が主体となり、女性はその周辺の対象となることを象徴的に物語っている。

サッカーにおける男女間格差

女子サッカーを論じようにも、まずは男子サッカーを参照しなければならない。出だしから取り組む主題の難しさに直面しつつも、二人の著者は女子サッカーに携わる人々の置かれた状況とその歴史を、我慢強く記述する。

フランス女子サッカーには、意外なことに長い歴史がある。第一次世界大戦後、女性はずでにボールを蹴り始めていた。1933年には、「サッカー女子リーグ協会(Ligue Féminine de Football Association)」(52)が設立される。1971年には国家代表が結成され(日本は1981年)、オランダと対外試合を行っている(50)。

女子サッカーがフランスに早くから定着していたのと対照的に、それを管轄する組織には多くの課題が残されている。男女、プロアマの別を問わず、フランスのサッカー競技を統括する組織は、フランスサッカー連盟(Fédération Française de Football)である。女子サッカーの運営は、連盟のなかのアマチュア部門(Ligue du Football Amateur)が管轄する。つまり女子サッカー選手の身分は、ごく一部の外国籍選手やスター選手を除き、アマチュアである。選手は、ふだんはサッカーとは別の仕事に従事し、終業後にトレーニングに参加する。週末に仕事がある場合は、有給を取り試合に出場する。

そもそも分母が少ない。女子サッカー選手は、サッカー競技者の4パーセントを占めるにすぎない(67)。その内のさらに数パーセントだけがプロ契約に到達する。引退後の身分は、男子選手以上に過酷である。女性審判は、審判全体の3パーセントにすぎない。もちろん、男子の試合で笛を吹くことは稀である(16)。機会に恵まれたとしても、3部リーグ以下の試合が担当となる。くわえて、サッカークラブの経営者の95パーセントは男性である(16)。これが、国際サッカー連盟のランキングで6位に位置し、先のワールドカップとオリンピックで4位入賞を果たしたフランス女子サッカー界の現状である。

女子サッカークラブ

ケイゼルとオンタノンとは、著書のなかで、女子サッカークラブ主要5チーム(サンテティエンヌ、ジュヴィジエ、モンペリエ、リヨン、パリ・サンジェルマン)の現状と課題も詳しく紹介している。フランス女子サッカーリーグは、ワールドカップ以来、着実に発展している。リヨン(オランピック・リヨネ)は、女子サッカーの最高峰の大会であるヨーロッパ・チャンピオンズ・リーグを現在まで二連覇している(2013年4月現在)。

ところで、ジュヴィジエを除く4クラブは、男子の強豪チームも運営している。この水準においても、男子選手と女子選手の待遇の格差は存在する。この問題の大部分は、2011年以来、カタールの富豪——著者の言葉を借りれば、「男女平等が当たり前でない国」(124)の富豪——が実権を握るクラブ、パリ・サンジェルマンに収斂する。この首都のクラブの勝利ボーナスは、男子が一人12000ユーロであるのに対して、女子は140ユーロである(75)。男子のスター選手は、税抜10億円以上の報酬を得るが、女子選手の最高年俸は多く見積もっても3,000万円である(しかもフランス人選手ではなく、リヨンのスウェーデン人選手リンダ・シェリン、72)。格差は数え上げたらきりが無いが、そのなかでも焦眉の問題は、著書で多くの頁が費やされているように、スタジアム使用の問題である。パリ・サンジェルマンは、パリ16区にパルク・デ・プランスというスタジアムを保有している。約45000人の収容人員を誇り、陸上トラックを排したサッカー専用競技場の理想形である。パリ・サンジェルマンの女子チームがこのスタジアムで公式試合を行ったのは、40年以上の歴史のなかで、たった一度である(2009年、105)。彼女たちの出場する試合は、ほとんどが交通の便の悪いサン＝ジェルマン＝アン＝レーで開催される。したがって、パリ・サンジェルマンという同じチームに所属しながら、男女の選手が顔を合わせるのには、年に一度の納会だけである。男子選手はチームの用意した大型バスで移動するが、女子選手は各自公共の交通機関を使った現地集合、などという笑えない逸話も著者二人は紹介している(129-130)。こうした問題は、

程度の差こそあれ、男子チームと女子チームを同時に運営するほとんどのクラブに共通の問題である。

同じ待遇は可能か

ケイゼルとオンタノンとは、以上に見たとおり、女子サッカーの問題を、男女間の格差に訴えつつ執拗に記述している。多くの読者は、フランス女子サッカー界の窮状に共感するはずである。しかしながら、読み進めるうちに、ふとした疑問も湧いてくるはずである——男子選手と女子選手の待遇を同じにすることは、そもそも可能なのか。男子ほどの集客が見込めない女子サッカーの試合を、パルク・デ・プランスで常時開催することは無理なのではないか。実際に、リヨン会長のジャン＝ミッシェル・オーラスのような女子サッカーに投資を惜しまない人物も、報酬の格差を問われるやいなや、愚問と言わんばかりに、「それは市場の法則」(120)と切り捨てる。多くの読者は、サッカー選手の男女間格差の解消の可能性を模索しつつも、最終的にオーラスの意見に賛同するのではないだろうか。

こうした読者の反応を見越して、二人の著者は、著書の後半で妥協案を紹介し始める。スタジアム使用に関しては、パリ・サンジェルマンの創設役員であるクリスティヌ・ル・ガルの言説が引き合いに出される。「パルク・デ・プランスで[女子]選手がプレーするのは、理想的な宣伝手段である。ところが、彼女[ル・ガル]は、もっと本質的な問題に関わるのを好むようだ。たとえば、計画的な就労時間や健康状態への配慮が行き届いた、女子の競技条件の改善である」(126)。パルク・デ・プランスで女子選手が競技を行うべきかどうかという問題は、二人の著者の記述において、女子選手の就労環境を改善すべきであるというル・ガルの主張にスライドしている。

アマチュア身分の女子サッカー選手の給料を改善するために俎上に乗せられたプロ化の案件についても、二人の著者は、当の選手自身に、その難しさを主張させている。パリ・サンジェルマン所属の元代表選手カンディス・プレヴォストは、実際に、次のように述べる。「すべ

ての女子サッカー選手は、バランスのとれた生活を模索していて、自分のスケジュールを強く主張したいのよ。選手たちは、お金よりも価値基準を望んでいるということね。個人的にも、自分は男子サッカー選手のようにになりたいと思ってはいないわ」(132)。女子サッカー選手の多くは、プロ契約の下で賃金を上げることよりも、本業との「バランス」や競技環境の質(「価値基準」)の向上を望んでいる。つまり、大金を稼ぐ男子サッカー選手のようにしたいとは思っていないのである。スタジアム使用のケースと同様に、二人の著者は、プロ化の案件から労働環境の改善案に、議論の内容を組み換えている。

しかし、二人の著者は、議論をすり替えることで、問題の解決を放棄しているわけではない。著書の第5部(145-150)で、彼女たちの意図が明らかとなる。この箇所では、二人の著者は、女子サッカー選手の待遇改善案を起草する。主な案は、「初等教育におけるサッカーへのアクセスの簡易化」、「女子プロリーグの創設」、「試合後三日の体力回復期間の設置」、「チケット定期購入制(シーズンチケット)」、「男子チームの前座試合における女子チームの試合開催」、「男子チームの試合における同数の男性審判と女性審判」、「広報活動やキャンペーンにおける男子選手と女子選手の同時参加」、等々である。プロ化と審判以外の案件は、早急に実現されうる提案である。

ケイゼルとオンタノンの著書は、女子サッカー選手のアマチュア身分、男子選手との待遇の格差、等々の短期間で解決しがたい問題をあえて提起する。読者には無謀にも見え、著者をも出だしから苦しめる問題設定は、上記の草案を一つの落としどころとして示すために、なされたのである。この点において、この著書は、男女間の格差から女性の権利をよみくもに訴えるのではなく、権利拡張の方途を冷静に模索していることが確認できる。そして、このことこそが、著書の知性を代弁していると言える。女子サッカーにまつわる情報が、具体的な数字で簡明に記されている。晦渋な表現を避けた文章は、時に退屈で無味乾燥なものに映るが、翻訳には適している。女子スポーツにまつわる書物としては、近年稀にみる良書である。

¹ Audrey Keyser et Maguy Nestoret Ontanon, *Football féminin. La femme est l'avenir du foot*, préface de Lilian

Thuram, Lormont, Le Bord de l'eau, 2012. 引用に際して、頁数を表記する。